



現代はなぜ「感性の時代」なのか

志岐幸子 Yukiko SHIKI

関西大学人間健康学部 教授・元スポーツキャスター



科学上の多くの大発見には、偶然から幸運を掴み取る能力である「セレンディピティ」が貢献していることがよく知られている。セレンディピティは、偶然を見逃さない鋭い感性あってこそ発揮される能力である。

感性については、これまで非科学的なものとして批判されたケースが多々見受けられたものの、化学・物理学を中心としたノーベル賞受賞者の先生方によって、研究における感性の重要性が一様に指摘されている。内的感覚である感性は、センスや才能、美意識、第六感、創造性、想像力、表現力、倫理観など幅広い意味を持つ。その定義はここでは割愛させていただくが、例えば、データ上は一見、問題ないように見えるものの何らかの違和感を覚えたり、論理的にはAよりBを選択すべきときに、どうしてもBの方がよいと強く感じたりすることが、感性の働きとしてもたらされる直感であり、これに従って最適な状況を生み出すことが、感性を使うということになる。

一方、スポーツ界では、イチロー選手のような世界レベルのトップアスリートは、自らの成績が順調に出ている段階でも感覚の狂いに気づき、データとして表面化したり、フォームの狂いが目に見える形に現れたりする以前に、いち早く修正できる感性を備えている。だからこそ、このようなアスリートにはスランプがほとんどない。また、サッカーでは見た目には優勢にある時にも失点の危機を予感し、それを未然に防ぐべく守備態勢を整えるために、直感が活きるという。

感性は、スポーツの世界で最高のパフォーマンスを発揮する心理的帯域として知られる「ゾーン」に入ることの礎となるものであり、この領域には逆境に置かれているときに入るアスリートたちが非常に多い。我々の社会もまた世界規模で逆境にあるといえ、環境問題が目に見える形で深刻化する以前に、科学がデータ上の予測を示す前に、このままでは地球が存続できなくなるという危機感を持ち、それを避ける行動を取ることが求められていたはずである。このような感性はまた、我々自身や家族、組織や国家を危険から守ることに貢献する。

アスリートの意識が観客や自然、道具への利他性を発揮し、それらと一体になるときにその感性が最もよく働くように、真の感性は人間の利便性や快適性の追求を超越して、実験対象との一体感を得るほどまでの他の対象への愛情が伴ってこそ機能するものである。したがって、新しい科学技術を利用する際には、人間の感性がそれを使うに相応しい状態になっていなければ、悲劇が生じてしまう。だからこそ、「感性の時代」と言われる現在、科学が発展すればするほど我々の感性はより一層、磨かれることが求められている。

© 2018 The Chemical Society of Japan